

脫線事故



はじめに

シナリオ・センター研修科の学習課程で創作したシナリオ「雪の日の脱線」を収録しています。

映像にすると約10分のショートドラマになります。

この物語はフィクションであり、実在の人物、団体、企業とは一切関係ありません。

表紙画像：アルブレヒト・アルトドルファー（1480頃-1538）「キリストの捕縛」

人物

穂村大樹（40） 北海電機・製造部主任

乾紘一（40） T R 北海・広報室長

高松豊彦（60） T R 北海・代表取締役社長

穂村加奈子（38） 穂村の妻

「雪の日の脱線」シナリオ本文

○雪道を走る電車

電車が雪道を暴走している。車輪からは火花と煙。非常ランプが点滅している。

○北海国際スキー場・ゲレンデ

雪が舞っている見晴らしの良いスキー場である。

穂村大樹（40）と乾紘一（40）、二人並んでスキーをしている。

○同・リフト乗り場

穂村と乾、リフト待ちの列に並ぶ。

穂村「まさかこんなオヤジになるまで、乾とスキーしてるなんて、若い頃は想像もしなかったな」

乾「今度は加奈子さんと哲郎君も連れて来いよ。うちも連れてくからさ」

穂村「哲郎さ、お前んとこの電車大好きなんだよ」

乾「うちの娘も穂村の会社で作ってるロボット掃除機、お気に入りなんだよ」

穂村「俺なんかこの歳でもまだ主任だけど、乾は鉄道会社の管理職だもんな。広報部長だったっけ？」

乾「広報室長。部長職なんてまだまだ」

穂村「出世したな」

乾「それよりどうだ？ 今度電車を運転できるイベントやるんだけど、哲郎君連れて来ないか？」

穂村「ありがとう。哲郎も喜ぶよ」

乾「広報室長の役得だ。たっぷり運転させてやるよ」

穂村「持つべきものは友だな」

穂村と乾、2人乗りリフトに乗る。

○同・ゲレンデ

穂村と乾、並んで滑っている。

乾、急ブレーキして携帯を取り出す。

穂村、少し先で停まる。

穂村「どうした？」

乾「会社から電話だ」

穂村「広報室長様は忙しんだな」

乾、携帯を耳に当てて、

乾「何？ 脱線事故？ わかった。すぐ戻る」

乾、携帯を耳から離し、

乾「穂村ごめん。急用ができた」

穂村「事故って聞こえたけど、大丈夫か？」

乾「悪い。穂村はゆっくりしてってくれ」

乾、急いで滑走していく。

○同・レストラン

スキーヤーが大勢いるレストランである。

穂村、一人でラーメンを食べている。

穂村、携帯を取り出し、耳に当てる。

穂村「加奈子か。どうした？ そんな慌てて。え？ 哲郎が？ 本当なのか？」

穂村、立ち上がる。

○電車衝突事故現場・外観

電車がL字に折れ曲がり、線路から脱線している。

大破した先頭車両に雪が降り積もっている。

救急車のサイレンが鳴り響く中、大勢の救急隊員が救急活動が続けている。

○同・現場付近の道路

大勢の野次馬。

立ち入り禁止のテープ手前に穂村と穂村加奈子（38）がいる。

穂村「哲郎！ 哲郎はどこだ？」

穂村、係員に制止される。

○TR 北海・広報室

電話が鳴り続けている。

乾、職員達を前にして、

乾「会社の正式なコメントは俺が作成する。マスコミに質問されても自分の意見は言わないよう
駅員に伝えるんだ」

高松豊彦（60）が部屋に入ってくる。

職員全員、高松の方を向き、敬礼する。

高松「乾室長、忙しいところすまないが、ちょっといいかな？」

乾、高松の方へ駆け足。

○同・社長室

高松、椅子に座っている。正面に乾。

高松「就任そうそう済まないね」

乾「とんでもありません社長。こういう日のために私達の部署が存在するんですから」

高松「事故の原因だが、どう説明しようか？」

乾「まだ調査中と言うしかないでしょう」

高松「乾君、今日は雪が降り積もっていたね」

乾「はい？」

高松「ブレーキがきかなかったんだろう。雪のせいかな？　これは」

乾「車両の老朽化と、整備不良が原因かと思われませんが」

高松「雪が詰まれば、ブレーキもきかなくなる。乾君、雪には抗えないよ」

高松、乾を真顔でじっと見つめている。

乾「社長、しかし」

高松「せっかくのキャリアを終えるつもりか？　会社の存亡は君にかかっているんだぞ」

乾「ブレーキ異常について調査を進めます」

高松「君は優秀な広報室長だ。この事故を乗り切ってくれると信じてるよ」

乾、高松に礼をする。

○北海救急病院・外観（夜）

○同・集中治療室前の廊下（夜）

救急患者が次々と運ばれてくる。

穂村と加奈子、ベンチに座っている。

乾、コート姿で現れる。

乾「穂村、どうしてここに？」

穂村「どうしてだろうな。乗ってたんだよ、哲郎が先頭車両に」

加奈子、穂村に抱きついて泣く。

乾「加奈子さん、申し訳ない」

加奈子「帰ってもらえますか？　鉄道会社の人となんて……」

廊下にいる人々が乾を見つめる。

乾、頭を下げて、その場を立ち去る。

○穂村家・表

雪が降っている。玄関前に高級車が停車。礼服姿の乾と高松が車を降りる。

乾「社長、次はこちらです。息子さんを亡くされています」

高松「君の親友のご家庭だと聞いているが」

乾「お気遣い恐れ入ります。参りましょう」

乾、玄関のドアを開ける。

○同・居間

奥に家庭用の葬儀祭壇と菊の花。

穂村哲郎（8）の笑顔の遺影がある。

礼服姿の乾と高松、穂村と加奈子の前に正座で座っている。

穂村「加奈子、お茶の用意を」

加奈子「TR北海の人にお茶なんて」

高松「お気持ちごもっともです」

加奈子「だいたい社長さん、あんな事故起こしといて、よく社長続けられますね」

穂村、加奈子の前に手をかざし、

穂村「加奈子、それ以上言うな」

加奈子「親友の会社だからってかばうっていうの？ 哲郎殺されたんだよこの人達に。哲郎もう帰って来ないんだよ」

穂村「社長さん、乾と2人にしてもらえますか？」

高松、席を外す。

穂村「加奈子も。乾と2人で話したいんだ」

加奈子、乾を冷たい目で一瞥する。

○同・居間と玄関をつなぐ廊下

高松、居間の扉の前に立っている。

○同・居間

穂村と乾、向かい合って座っている。

乾「穂村、すまなかった」

穂村「謝ってもらっても、もう哲郎は帰って来ないよ」

穂村、哲郎の遺影を見つめる。

穂村「なあ乾。俺は今でもお前のこと、親友だと思ってる。俺だけでいい、本音で話してくれないか？」

穂村、乾に事故を伝える新聞を見せる。

穂村「雪が付着したからブレーキがきかなくなったなんて言ってるけど、嘘だろこれ」

乾、押し黙っている。

穂村「雪なんて毎日降ってる」

乾「あの日はたまたま大雪で」

穂村「一応俺、電機メーカーの社員だぞ。何で哲郎が乗っていた電車だけ、雪でブレーキがきかなくなるんだ？ 会社の不備を隠してるんじゃないのか？」

乾「隠し事なんてない。雪が付着してブレーキがきかなくなった。暴走する恐れがあったため、緊急停止装置が働いたんだ」

穂村「脱線して列車は大破したんだぞ」

乾「安全装置の正常動作による事故だった」

穂村「新聞に書いている通り、車両や整備に不備はない。人為的ミスはなかったって言うんだな？」

乾、うなづく。

穂村「乾、見てみろよ、この顔」

穂村、哲郎の遺影に線香を立てる。

穂村「こいつを前にしてもそう言えるんだな。本当にそうなんだな？」

乾、唇を震わせている。

乾「穂村、お前だけに伝えてもいいか？」

戸が開き、高松が姿を現す。

高松「乾君、そろそろ移動時間だぞ」

乾、ゆっくり立ち上がる。

○同・表

乾と高松、車に向かう。

穂村、玄関から出てくる。

穂村「乾、本当のことを教えてくれ。俺とお前は親友じゃないのか？」

高松「急ぐぞ、乾君」

乾と高松、車に乗り込む。

穂村「乾！」

車が動き出す。

穂村、雪道を進む車を見つめる。（了）

雪の日の脱線～脱線事故隠蔽工作のシナリオ

<http://p.booklog.jp/book/80668>

著者：野尻有希

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/feltmail/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/80668>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/80668>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ